

当事者と家族を支え続けて

磯崎 たくみ
たか子さん

磯崎たか子さんは現在、障がい者の地域活動支援センターⅢ型「麦の家」の理事長のほか、豊島区手をつなぐ親の会の会長、豊島区障害者団体連合会の会長として活躍中である。

手をつなぐ親の会の前会長から小規模作業所「麦の家」を引き継いだが、障害者自立支援法施行に伴いNPO法人化、現在の形になって10年が過ぎた。

「麦の家」は閑静な住宅街の一角にある。カラフルな、色鉛筆を形取って作った看板が目印の「麦の家」を訪ねると、まるで手染めの職人をかかえる工房のように利用者の皆さんが緻密なデザイン画の制作の真っ最中だった。

「自閉的な傾向のある人は、細かな繰り返し絵をかくのが得意なのよ」作業途中のデザイン画を見せてもらって、小窓がたくさんあって、一つひとつきれいな色が重ねられている。

「好きな一つの絵を大きく描くのではなくて、模様になるように工夫してみよう」

磯崎さんの言葉がけで、一人ひとりのスキルが磨かれる。個性を生かした



1「大変だったが楽しかった」と話す磯崎さん 2利用者の描いた絵が素敵なトートバッグに 3作業中一人ひとりに丁寧に声をかける 4豊島区手をつなぐ親の会でのバスハイク 5一つ一つにはMUGIのタグがつけられて、ますますおしゃれなブランドになっていく。

デザイン布が、磯崎さんたちスタッフの手で小粋な手提げバッグに仕上げられていく。

人生の転機

磯崎さんは品川区生まれで8人兄弟の末っ子として生まれた。進学したければ自分で稼いでいきなさいという時代に、働きながら定時制高校で学んだ。その後結婚し、池袋に住んで50年になる。嫁ぎ先の印刷業の手伝いに加え、家事や育児で忙しかった。

昭和50年、次女が2歳半で化膿性髄膜炎の後遺症を負ったことでその後の磯崎さんの人生は一変した。「助かる見込みは五分五分」と医師の宣告を受けながら、6か月に及び入院を経て娘は、磯崎さんの元に戻ってきた。しかし言葉を失い、半身マヒが残った。

「生きて帰ってよかった、これから歩けるようになるかも」と安堵した一方で、「どうやって社会の中で生きていくか」と頭をかかえた。

退院して一年経った頃、娘の通える幼稚園探しに奔走した。しかし、発作があるから受け入れられないと断られ

た。新宿の東京都障害者センターの相談窓口で、当時の「千川子どもの家」にやっとたどりついた。

かかわりの中で生きていくこと

人とかかわる機会をつくるには家族だけでは限界がある。他人とのかかわりの中でいっばいの笑顔をつくってほしい。娘の生まれた頃は養護学校（現在は特別支援学校）の就学の義務化が始まったばかりで豊島区内には養護学校はなかった。やっとの思いで決まったのは北区にある東京都立王子養護学校だった。

養護学校に行けるようになって、気持ちがあつと楽になったと磯崎さんは言う。親として、いろんな勉強会に行った。娘を学校に送り出してから、自分も学校でPTA活動をした。娘が帰ってくる前に家に戻っていなくてはならないため、まるでタイムカードを押すかのような忙しさだった。でも、「楽しかったわあ」と磯崎さんは笑顔で語る。PTA活動に夢中になりすぎて、娘の送迎バスのお迎えに間に合わず、スクールバスが娘を乗せたまま車庫に

行ってしまおうというハッピーングが何度かあったと懐かしそうに語ってくれた。

「麦の家」を引き継いで

PTAでの活動を見込まれて、磯崎さんは手をつなぐ親の会の会長を前任の戸田会長から引き継ぐことになった。「麦の家」もその後引き継いだ。

区の就労施設でなじめなかったり、企業ではうまく働けずにいる人の情報が親の会を通じて磯崎さんのもとに入ってきた。せっかく民間企業に就職しても、景気が悪くなるとまずリストラされるのは障がい者である。「麦の家」はそのような障がいがある人たちの居場所であり、小規模な就労の場でもある。

磯崎さん自身個人で働きかけても「困っているのはあなただけでしょっ？」と言われ、相談窓口では何度も泣いた。そんな経験の持ち主だからこそ、手をつなぐ親の会という団体の活動の中で、障がい者の受け皿になる環境を作ってきた。障がい者の生活訓練やショートステイができる「福祉ホームさくらんぼ」が設置され、子どもスキップ（学

童保育）に知的障がい児が入れるようになったのも、地道な運動の積み重ねがあったからである。

これからの磯崎さんの希望を聞いてみた。

若い親御さんからは、「手をつなぐ親の会に入るメリットって何ですか?」と素朴に聞かれることがあると言った。知的障がい児の親も今や働くことが多くなった。制度が整ってきたよさであるが、半面、親同士の交流の場や、学校で過ごす子どもたちの姿が見えにくくなっているのではないかと思う。

「今気にかかっているのは、麦の家の利用者の高齢化。35歳から65歳の利用者がいるが、通えなくなったら遠方の入所施設やグループホームに入るしかない。地域で暮らしていけるグループホームが少ないことに課題を感じる」とのこと。

愛される子どもでいてほしい。愛される人でいてほしい。親としての愛情を、自分の子どもだけでなく社会に働きかけ続ける磯崎さんの活動はまだ続きそうである。

障がいがある子どもと親として地域社会に働きかけるいちずな思い

オール南大塚で安心安全のまちづくり

南大塚防災まちづくりの会

「南大塚防災まちづくりの会」は、豊島区およびかけを受けて、平成10年3月に南大塚地区の9の町会・自治会を母体に結成し、平成24年4月に東京都知事から第1回「東京防災隣組」認定を受けた歴史と実績のある会である。会の中心メンバーの細川会長と竹野町会長に話を聞いた。

会では、これまで「自らの地域はみんなを守る」を目標に、防災や安心安全の観点から、まちをみんなで点検し、自転車対策などまちの改善や家庭防災の啓発、防災訓練などに取り組んできた。

「大々的なことというより、身近なことをやっていく。自分たちでまちの課題を見つけて、行政や関係者の協力を得ながら改善していく。時間はかかるが、みんなで考え、話し合って、安心安全で住みやすいまちづくりをすすめていくこと、これが我々の活動なんです」。細川会長は、生粋の大塚生まれ大塚育ちである。三業地（※）の変わりゆく姿もすべて見てきた。町会にはすでに30年くらい関わっている。竹野町会

長も町会との関わりは長く、大塚の関係する会は竹野さんがほとんど関わっているといっても過言ではない。「次の世代を作りつつね」と次の世代にバトンを引き継ぐことも気に掛けながら、今でも第一線で活躍中である。お二人は、変わっていく大塚の街の姿も昔から変わらない姿もずっと見てきた。

「例えば、放置自転車の撤去、これも防災なんですよ」。以前、南大塚駅の南口・北口周辺には放置自転車で溢れ、通行する人だけでなく、緊急車両の通行妨害にもなっていた。まち歩きをしながら問題を見つけ、行政に働きかけ、一つ問題が解決された。この繰り返しだという。街を見渡せば、防災につながっていることは多い。

活動の中で、大変なことを尋ねると、細川会長は「今のメンバーでの知恵は出し尽くしてしまった感がある。いろんな人に参加してもらっているんなら

若い人の力で新しい人の力を借りて
オール南大塚で取組みたい



1 会のことについて語ってくれた細川会長と竹野町会長 2 まちづくりニュース 3 新しくなった大塚駅周辺前のまち点検 4 会のメンバーでの集合写真 5 巢鴨警察署でのテロ対策についての勉強会 ※3～5は南大塚防災まちづくりの会より写真提供

見をもらいたい。だから若い人や新しい人に入ってきてほしい。まちの見方が変わってもっと活性化されるんじゃないか。私たちはいつでもウェルカムです」と新しい風が吹くことに期待を寄せる。また自分たちの活動がきっかけで周辺団体の相乗効果の一助になればと。

このまちを愛し、このまちを知り尽くしている会のメンバーがいる限り、この地域の力はさらに強くなるだろう。

※芸者置屋、料亭、待合の三つの営業を持った地帯のこと

Data

団体名 南大塚防災まちづくりの会
活動内容 定例会、まち点検、防災訓練、放置自転車防止キャンペーン、年1回のニュース発行など

山本 もと

遼 りょう

(株式会社R65不動産)

2015年に設立したR65不動産は、65歳以上を対象に不動産の仲介をしている。高齢者でも簡単に入居できる物件を増やすため、大家さんの意識を変え、保証会社や保険会社とも連携して新しいサービスを開発している。会社を立ち上げた代表の山本遼さんは現在28歳、昨年には「R65+」を立ち上げた。

山本さんがR65不動産を立ち上げたきっかけには、以前勤めていた不動産会社に来た80代の女性との出会いが大きく関係している。その女性は何件も不動産会社をまわったが見つからず、山本さんも一緒に物件を探したが、やはりなかなか決まらなかった。高齢ではあったがとても元気で、引越しの日にはテレビを担いでタクシーから降りてきた。こんなに元気な人でも高齢というだけで、若い人の何倍も家探しに苦労する姿に疑問を感じ、年齢やそれぞれが抱える課題に関係なく、誰もが簡単に物件を見つけられる社会になるようR65不動産を立上げた。どういった思いで仕事をしているか聞くと、

自分や親の老後がより暮らしやすい社会になって欲しいという想いで仕事に取り組んでいる。社会を変えていくことによって、それが結果的に自分の生活につながっていく。

物件を探しに来るお客さんの中には、生活保護ではなかなか家が見つからないため、大家さんに生活保護を隠して入居させて欲しいという人もいる。しかし、そういった方に対しては、仲介は出来ないとお断りしている。それはなぜか。「大家さんも人、入居者さんも人だから、(お互い素性を理解した上で)しっかりとつなげていきたい」と話す。不動産仲介は単なる家のやり取りではなく、人と人とのつながりで成り立っているものであり、大家さんに対してもどんな要因が貸しにくさにつながっているかを丁寧に聞き取り、相手の立場で考えることを大切にしている。最後に地域に発信、伝えたいことと

大家さんも入居者さんも人

して山本さんは「最終的には地域のつながりはどうしてもなくてはならないものと思っている。僕たちは、住宅は提供できるが、それが全て暮らしかっというとは違って、それは周りにいる人たちがどれだけ支えてくれるか、どれだけ一緒にあって取り組んでいけるかがとても大事なことで感じます。」と

話す。65歳以上の人が家探しに苦労している社会から、「65歳以上の人が家を借りづらかったらしいよ」といえるような社会になることを望み、取り組み続けている。

Data

団体名	株式会社 R65不動産
日時	9時～18時
場所	杉並区荻窪4-24-18
対象	65歳以上
連絡先	050-3702-2103



1 山本さんの様子 2 R65不動産について話す山本さんの様子 3 勉強会の様子 4 建物内の様子

設立20年 住まう一人一人を結ぶ地域の絆づくり

高松二丁目町会 地域福祉推進委員会

「地域福祉推進委員会が区内で残っているのは、ここの高松二丁目町会だけなのね」

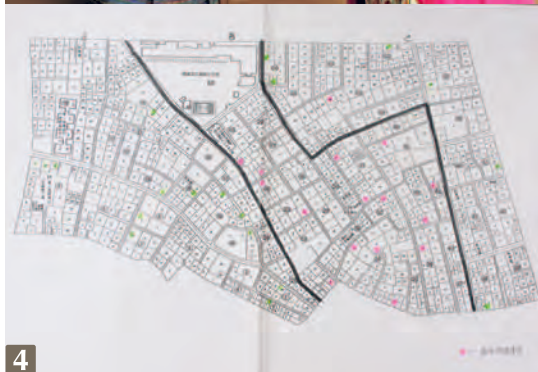
丁寧に書かれた町会の資料を紐解きながら説明してくださったのは、地域福祉推進委員を支援、協働する高松二丁目町会の民生委員の松田和江さん、野中富美恵さん、田村佳世子さんのお三方である。

平成7年当時、豊島区民社会福祉協議会の掲げた地域福祉活動計画の一つに、住民参加型福祉社会の創造を目指した事業として「地域福祉推進委員」の推進、設置があげられる。

これは主に町会単位で福祉課題の発見、予防等の役割を担うもので、平成10年、モデル地区として高松二丁目町会が選ばれた。

委員設置から20年近く経った現在でも、継続した地域活動として根付かせているのは、高松二丁目町会だけだと言われている。

なぜ、この町会に地域福祉推進委員



1 工夫を凝らしての地域福祉推進委員会 2 地域福祉推進委員会へのお声かけ 3 マグネット式になっている町会の安心・安全相談窓口プレート 4 町内に地域福祉推進委員がバランスよく配置されている 5 (左から)野中さん、塚田さん、田村さん、松田さん

を根付かせることができたのか、またどのような経緯があつて地域福祉推進委員会が、生きた町会活動の一つになつているのだろうかという素朴な疑問が沸いた。

町会組織に組み入れる

「町会内全地域に受け持つてもらえるように、町会内の仕組みの中に取り入れたところは、大正解よね、すごいしくみだと思つ」と、現在7期目の民生委員を務めている松田さんは言う。そのすごさとは何か。

一つめは、これからの地域づくりを福祉の視点から機能させる意味で、既存の町会組織に地域福祉推進委員を組み入れたことである。高松二丁目町会は20地区に分けた地区制度を設けている。1班長が5軒程度を受け持つが、4、5名程の班長をまとめるのが地区委員である。高松二丁目町会では、この地区委員が地域福祉推進委員を兼任することで、暮らしの課題を抱える住民の緩やかな見守りを行っている。そ

の情報を民生委員と共有し、連携して今後の対応方法を探っている。

さらに、地区委員は2年交代の持ち回りなので、見守りの意識が一部の町会員に偏ることなく、町会全体に積み重なっていく仕組みになつている。

「見守りって言ってもね、普段の生活でわかるのはお隣近所位でしょ？だから町会員が持ち回りで、地域福祉推進委員を受け持つば、見守りの意識が（住民の中に）積み重ねられるでしょう。」と松田さんは熱く語る。

しかし、現実には、町会地図に地域福祉推進委員の該当者がいない空白地帯が出てしまうこともある。気になるエリアは、元町会役員が引き受ける等の対策もなされると聞いた。

住まう一人ひとりの生活に届ける工夫

すごさの二つめは緩やかな見守りだけでなく、地域福祉推進委員の活動の一部を親しみやすい形に変えたことだ。地域福祉推進委員設置から10年目の平成19年度から、報告会や状況報告に加

えて、「おしゃべりタイムやフラダンス、お茶会」等のイベントを加えた。町会に入っていない方にも地域福祉推進委員の存在を知ってもらうために、町会の掲示板にも地域福祉推進委員会の案内のチラシを貼つているとのことだ。

お三方が持参された地域福祉推進委員会のチラシには「安心だ輪、楽しい和を広げよう」という、キャッチコピーが何回も使われていた。住まう人の耳に残るような温かな言葉が添えられて、委員会のイメージが、より親しみやすい響きになつている。顔なじみの固定メンバーだけでなく、少しでも広く地域福祉推進委員の活動を知ってほしいという思いがチラシ作りからも感じられる。

地域には町会に入っている方も入っていない方もいる。「気になるときはできるだけ自ら出かけていくの。動けば動くほど自分たちを知ってもらえるし、知ってもらえばコミュニケーションが

少しずつ広がるし、何か気になることがあれば声をかけてもらえるでしょ？」と田村さん。「地道に「ツッコ」、地道な活動こそ大切な」と野中さんもうなずいている。

もし災害があつたらどうしよう、こんな時一人暮らしでは困るなあ、認知症になつたらどうしよう、ちょっとした困りごとがあるんだけど…そんな時に活用してほしいとの願いを込めた、お三方の連絡先と福祉なんでも相談の連絡先の入った町会の安心・安全相談窓口プレートが誕生した。

身近な所に貼つて活用してほしいと、高松二丁目町会70周年の節目を記念して、町会員950世帯に配布した。

緩やかな見守りとお互いさまの心で地域の絆を深めあえるように、住まう一人ひとりの生活に届く、高松二丁目町会地域福祉推進委員会の工夫と模索は続いている。

見守りの意識を積み重ねていく仕組みをつくる

まちを愛し、きずなを深める

町会をはじめ、地域活動に精力的に活躍中。特に立ち上げから関わっている「きずなサロン」には思入れが強く、日頃から参加者に楽しんでもらいたいと常に考えている。素敵な笑顔の奥には野口さんの真面目さがにじみ出ている。

地域活動のヒント

野口さんは京都府出身。地元の中・高校連携校のミッションスクールに通い、そこでフランス語と出会った。大学でも引き続きフランス語を学び、卒業後は営業職に就いた。もともと自社製品を輸出していたが、現地生産して、欧州市場に売り込んでいく方向へ変わっていった。

入社して5年が経った頃、日本の政府が国際人を育成しようと、「EIT」という貿易研修センターを作り、官僚や企業などから選出された120名と共に1年間共同生活をするという研修に参加した。

研修終了後、アメリカ駐在へ。1992年から2004年まで12年間フランスに駐在し、ここでの暮らしや出会

野の口ぐち
一とし治はるさん



1人を和ませる、こぼれる笑顔が印象的な野口さん 2フランス駐在時代。同僚たちと一緒に 3教会と緑とが融合する風景が大好きだった 4きずなサロンの司会を取り仕切る。尊敬している町会長(右)と共に 5池袋本町一丁目地域見守り検討会発足当時の頃

いが、のちの地域活動へのヒントとなった。500人ほどの小さな田舎まちで、周囲はブドウ畑や牧場に囲まれていた。よそ者の野口さんにもまちの人は親切だった。そして人々は、まちをきれいにしようと花を定期的に植えていた。こういった雰囲気は素敵だなど、しみじみ感じていた。長年単身赴任をしていたので、妻子が暮らす地元とはほとんど接点がなく、「日本に帰ってきたら、池袋本町をあのまちのようにしたかった」と話す。そして退職後、「池袋本町新しいまちづくりの会」へ参加し、まちの緑化に力を注いだ。

サロンの立ち上げ〜何もないとこから立ち上げた、きずなサロン〜

地域活動に尽力していた頃、町会長から声がかかった。その当時は「孤独死」が頻繁にメディアに取り上げられ、社会問題として問題視され始めていた。池袋本町一丁目からは孤独死を出さないうようにしたい、と会長が立ち上がった。中核となるメンバーを町会長自ら

10名選出し、その中に野口さんも選ばれた。集まったメンバーは経験豊富で、まちを愛する人ばかりだった。こうして「池袋本町一丁目町会地域見守り検討会」が立ち上がった当初のメンバーに2名加わり、現在は12名。そして地域見守り検討会で話し合いを重ねた結果、サロンの必要性を感じ、「きずなサロン」を開催することになった。見守りが必要だと思われる方を町会の各班長から聞き取りをし、手作りの見守り名簿で見守りマップを作成した。その名簿をもとにメンバーで手分けをしてサロンにお誘いしている。

きずなサロンを実施するにあたり、野口さんは、営業をやっていた経験から、相手の立場になって物事を考えるようにしている。そして、みなさんから「出てきてもらう」という視点を重視している。サロンのチラシを渡す際は、必ず手渡しにしている。ポストに入れただけでは、手に取ってもらえないから分らない。サロンに出てこれな

くても、実際にお会いして「お元気ですか」と声掛けを続けることで信頼関係が生まれてくるのである。

きずなサロンを始めた当初は高齢の一人住まいの方のみを対象としていたが、家族と同居していても日中独居の方もいるため、町会内に住む高齢者であれば参加できるように対象を広げた。参加者にいかに楽しんでもらうか。野口さんはいつも参加者のことを中心に考えている。

また、野口さんは「まずは参加すること」を大切にしている。「実際に自分がそこに入っていったその場の雰囲気を感じることが大切。例えば意見を言わなくても、いろいろな人の話を聞くだけでも意味があります」

ちなみに野口さんのファーストネームは、「一治」と書く。「最初に治める」と読むことができ、名前のとおり最初に携わることが多い。ミッションスクールでは二期生だが、ISTの研修は一期生。フランスでの駐在も立ち上げから

関わり、「何もない野原を耕しながら奮闘してきたというイメージですかね」と笑いながら話す。きずなサロンも何もないところから立ち上げた。

大切にしている、きずな

何よりも人に感謝の気持ちを忘れない。「はたから見てもうらやましい町会じゃないかな。他の町会にもお友達はいらるうから、そういった人も参加してもらい、自然と他の町会にもきずなサロンのような取り組みが広がっていったほしい。きずなサロンが今日あることはスタッフのおかげであり、このメンバーだからこそ、ここまで続けられてきていると思います」。人が好きで、このまちが好きで野口さんの言葉には、熱い思いが多くちりばめられている。

ISTの仲間とは今でも交友関係が続いている。月に一度、皇居ランのため集まり、昼食会をしている。ここでも仲間との『きずな』を大切にしているのである。

「一治」最初に治める

何もない野原を耕しながら奮闘してきた

兼業音楽家「やきとり王子」

ながさきむら村議会

竹田^{たけだ}

克也^{かつや}さん

豊島区长崎出身・在住。シンガーソングライター、東長崎「やきとりキング」の二代目、まちづくり会議「ながさきむら村議会」発起人。映画や美術、哲学などにも関心が深く、常にSNSなどで情報発信をしている。それぞれの活動を通じて普遍性を日々模索している。趣味はかえるグッズ集め。

お店を継ごうなんて全然思っていなかった

生まれも育ちも豊島区长崎の竹田さん。小学生の時からクラス会、学級委員など積極的にやるタイプ。

クラシック好きな父親の影響で小さな頃から音楽鑑賞は日常だった。小4〜5年の時の同じ名前の竹田先生との出会いが「曲を作る人になりたい」と思う最初のきっかけで「モテたいからじゃないですよ。意外と(笑)」と彼の音楽のルーツを語ってくれた。

中・高校生の頃は「店の手伝いなんて!」という感じだったそうだ。20歳代後半に「音楽をやりたいのか?音楽で食いたいのか?」と自問自答していた時に、両親から言われた「活動の拠



1「あまり人がやらないことに「サクツ」と手を挙げてしまうタイプです」 2「どんな人たちともお友達になってしまう「やきとり王子」 3負担感なく楽しい「ながさきむら村議会」、 4ランチャイムコンサートでのミュージシャンの顔 5お店の壁は地元の子もたちが描いた絵や地域の情報でいっぱい

点にしなよ」とという言葉をきっかけに東長崎の焼き鳥店「やきとりキング」2代目、が誕生することとなる。

ながさきむら村議会、の誕生

せっかく自分の故郷の長崎に戻るのなら、地元で自分ができることをやりたいと思ひ、地域のつながりを作る何かをやるかと考えた。そのためには、街の人や商店会だけでなく、色々な形で街に関わっている人、例えば、仕事で来ている人や買物に来る人など、そういう人たちも含めて、もっと自由に話せる場所をつくりたいと竹田さんは思っていた。

また、彼は、「震災後、人とのつながりが、がないことに対する不安を持つ人の存在を感じるようになった。でも僕はたくさんの、つながりを持っていくから不安に思わなかった。じゃあ、そういう、つながりを持って場所を作ればいいのでは？」と考えていた。そこで、同じような問題意識を持っていた地元仲間自分の考えを話したら、「おもしろそうだね」ということ

で、2012年に商店会の人など声をかけられる人に集まってもらったのが、ながさきむら村議会、の始まり。

「つながる」ということのために集まったが「最初は何も起きなかった」という。2回目以降来ない人もいた。何かやると思ってたけれど何も起こらなかったからだ。それでも竹田さんにとっては「何も起こらなかったけれど、集まった」ということがすごく大きかったという。

ながさきむら村議会、ってどんな会？

当初は、ながさきむら村議会、を知ってもらうために、「何か起こさない」と考え、東長崎の北口の駅前広場を活用したラジオ体操や、千早高校の先生と連携して、高校生が大活躍した「ランチタイムコンサート」などを仕掛けたりした。

ながさきむら村議会、は、「何かやること」ってなった場合に、じゃあ自分はどういうものを出せるよ、私がお金を出せるよ、当日手伝いに行けますよ、宣伝は手伝えますよ、こういう技術

持っているからポスター作りますよ、というのをちよつとずつ出し合いやりたいことの実現に向かってゆく。それができるということがわかっていっている、会として何かをやるよという場ではない形になっているのが今の姿。

「それでも会議の後に、楽しかったよ」と言ってくれる人がほとんど。そこに行けば街の情報収集ができる、街の人と話せる、自分の宣伝ができる、とか、そういう場所が月1回必ずあるということには意義がある」と会の変化を素直に受け止める竹田さんの姿があった。

靴は何足でも履き替えていい

竹田さんの今の活動について、やきとりキングの2代目と音楽活動とでの二足の草鞋（わらじ）と言われるところではなく、「靴は何足でも履き替えてもいい」と思っているから。草鞋だろうと靴だろうと長靴だろうと、持っておけばね、履きたいときに履けばいいんじゃない？下駄箱に入れておけばいいじゃん」と返ってきた。竹田さんの活

動のマルチぶりの根源はこうした考え方にあるのだろう。

そんな竹田さんの今後の展望（野望？）について伺うと、「自分が作曲したCDを作る」、「アート活動している人が東長崎で活動できる場所をつくる」とか、「この地区にもたくさんの外国人が暮らしているので、ながさきむら村議会、風の、ゆるっ」とした交流の機会を持ちたい」とかいろいろなることを考えたいという。

竹田さんに対する地域からの期待の声は大きい。「そういう期待は感じるけれど、僕に期待するのではなくて、自分に期待してほしいと思っている。『愛されるよりも愛したいまち』ですから。どこかで聞いた歌詞みたいですけどね（笑）」という言葉から、地域は共に生きていく人たちがみんなできつていくものということ気づかされる。それを体現している場の一つである、ながさきむら村議会、の存在に今後も注目していきたい。

僕に期待するのではなくて、自分に期待してほしいと思っている。



今後の展望の一つを早くも実現！
Self Portrate Series001
[Train]
2018年3月12日発売（4曲入）
CD制作作業の全てを竹田さん自身が手掛けた完全自主制作盤。
お問合せ：やきとりキング

地域の小さなアンテナ役

地域福祉サポーター

坂本 幹夫さん

「僕ってね、（人と人を）つなげる人間みたい、地域のコミュニティサロンで小唄の会員募集のチラシに僕が掲載されたら、会員が続けて入ってくれたらいいよ」と嬉しそうに語ってくれた坂本幹夫さん。

現在は地域福祉サポーターとして、コミュニティサロンのらくゆうサロン千川の杜や「せんかわ」ふるさとひろばで活躍中である。

また自宅近所にある小さな花壇は街歩きにきたカップルの撮影場所になるほど。丹精込めて花を育てているのも坂本さんである。

戦争直後に生まれて地元要町三丁目で生まれ育った。体の弱かった父に代わって母が営んでいた金物屋を継いで40年。「やりたいことはあったけど長男だったからね。学校を卒業してから丁稚として修業を積んだ。家業に専念している間は自分の時間はほとんどなかったね」

そんな坂本さんに転機が訪れたのは12年前。怪我をして一時は一生車いすの生活かもしれないと医師から言われ



1 坂本さんの笑顔が人と人をつなげている 2 4 「せんかわ」ふるさとひろばでは乳幼児から高齢者までの幅広い年代層が集まる 3 らくゆうサロンに参加のボランティア中島さんと 5 丹精込めて育てている花壇花咲くところが楽しみ

るほどの障がいを負った。店もたたんだ。リハビリに専念して2本杖で自力歩行が可能になった。だがしかし、自分のやることがないのでは…と思いはじめた頃、区報の「地域福祉サポーター募集」の記事を見つけた。「障がいがあっても、病気をかかえていても大丈夫」と、社会福祉協議会に確認の電話をして早速応募したと言っ。

笑顔の秘密

坂本さんの包み込むような穏やかな口調と笑顔は天性のものかと思っていたが、意外な言葉が返ってくる。

「こんな顔ができるようになったのはここ3、4年。医者の方から、作り笑顔でもいいから笑った方がよいと奨めてくれた。笑顔になると、頬の筋肉が上がる。そうなると血流が良くなって体温が上がって免疫力があがると医学でも証明されているらしいね」

「障がいを負う身になってみると、近所の方からの挨拶一つに敏感になった。自分にかけてくれる挨拶が有難かった。

また海外から来た人が、駅のエレベーターの扉を開けて待つてくれることが嬉しくなった。『もう歩けない』と言った医者の言葉に奮起して懸命にリハビリしている自分の姿をみて、近所の方が声掛けしてくれた。自分の努力している姿を見てくれる人がいると思うとさらに元気になった。そのうちに、背後に杖の音が聞こえただけで、『坂本さんかな?』と気づいてくれるようになってますます嬉しくなった」

地域福祉サポーターになってからはいろいろな人と触れ合うことで、自分でも気づかなくなった何か、自分の中に残された部分が人の役立っているのを実感すると言っ。地域の合唱サークルに参加してみると、60人の半分は独居の高齢者だ。声を発すること、話をするのがどれほど大切かを感じる。

家庭の中も変わった。妻の話をたくさん聞いて、思っていたことを吐き出させるように努めたら、どんどん家中が明るくなってきた。「会話をしてい

るとね、相手の表情がぱっと明るくなる瞬間に気づくんた。人は、思っていることを我慢したり、ため込んだりしないで、話することで自分の心の谷間を浅くすることができるんだね」

先日参加したサロンで、認知症と見受けられる母親とその息子に出会った。双方が明るい表情をしていたので、どうして明るくいられるのか秘訣を聞いた。「嫌なことは嫌とお互い言っ、ため込まない、そして後をひかないようにしている」と話してくれた。

2年間働いていた時の丁稚先のおかみさんには、たくさん世話になった。迷惑をかけても決して見捨てない人だった。その時の出会は大きかったという。「その恩はその人には返せない分、今、地域福祉サポーターとしての言葉かけを大切にしたい。また挨拶を交わす人々に気持ちを返したい」

「今、話をしていることはごく普通のおじさんおばさんでもできるんだ。一人ひとりが背負っているものは声をか

けることでお互いのものになるんだ。声掛けがあったら世の中がつながるよね」

サロンの行方

今、坂本さんが力を入れて関わっているサロンの展望を聞いてみた。

「らくゆうサロン千川の杜では、参加したゲストがいいなあと思ったら知り合いを誘っ。そんな形で続けられたらと思う。あなたが来て楽しんでくれると嬉しい、と自然体で言える、そういう人ならばどんどん参加してくれたらいい。『見学』ではなくて、『体験』して役割を持つことで、その人の居場所ができる。そこに行けば元気になる。お互いに持っているものを出し合っ、サロンの帰り道はいつもルンルンになるんだよ。サロンに行っって良かった、という思いを持った人が、各々の地域に持ち帰っ、点と点が線になり面になる活動ができればいいよね」。

ますますの坂本さんの笑顔の活躍を期待したい。

会話をしているとね、相手の表情がぱっと明るくなる瞬間に気づくんた

人の「こころ」を結ぶ「ゆいまある」

中澤 己代子さん(NPO法人ゆいまある代表)

1933年東京芝に生まれ、豊島区千川在住。和紙工芸家、NPO法人「ゆいまある」を主宰して牛乳パックのリサイクルによる和紙工芸をはじめ中学校のリサイクル教室や高齢者の生きがい支援など多彩な活動を展開。東京を中心に学校や生涯学習センター及び高齢者福祉施設等で和紙工芸の指導にあたる。主な著書に「地球にやさしいリサイクル 牛乳パックで作る小物」「牛乳パックで作る小物Ⅱ 応用編」「夢 翔いて KOMONO—牛乳パックで作る小物百科—」がある。

最初の一步

中澤己代子さんが、ボランティア活動を始めたきっかけは50歳頃。まだ子育てや家事に夢中なごく普通の主婦をされていたが、子育てもひと段落したころ「私の人生、本当にこれでいいの?」という気持ちがふつふつと沸いてきた。ちょうどその頃、知人の母親の介護をしていたためか、「社会に何か貢献したい」という思いがあり、福祉の専門学校でホームヘルパー2級の資格を取得した。そして、地域のデイス



1 百本のバラの花束を目指すメンバー 2 「どのような作品をつくろうか」と思案中の中澤さん 3 お人形さん 4 一つひとつに愛情が込められています 5 KOMONO

ビスでボランティアとして姉様人形の作り方を教えていたところ、「和紙を着せたお人形がきれい」などと、とても喜んでもらえた。ボランティア活動の第一歩であった。

牛乳パックとの出会い

平成になった頃、東京のゴミ問題が大きな社会問題になり、「リサイクル」という言葉が身近な課題になっていた。「くっかんちょう」という鳥の形をした空き缶回収ボックスや牛乳パックの紙すき、廃油から石鹸をつくる等、リサイクルを実際に勉強する機会が増えていた。そんなとき、豊島区からリサイクル実践教室の講師を頼まれたことが、「牛乳パック」との新たな出会いとなる。

ゆいまある誕生

平成2年に、この教室の参加者たちとボランティアグループ「和紙工芸グループゆいまある」を結成する。最初は、牛乳パックで葉書をつくるなど、手探りの状態がつづくが、次第に牛乳

パックの形を生かした小物作りへと集約されるようになる。活動は、区内の施設や学校などに牛乳パックを再利用した和紙工芸を紹介していくうちに、ほかの地域からも教室を開催してほしいと声がかかり、さらに展示会やお祭り、イベントなどへの出品依頼が来るようになる。その反響は海外のフランクフルトやナポリにまで渡り、ドイツでは「KOWONON（小物）」が外来語として広まった。

ゆいまあるの2つの縁むすび

「ゆいまある」は、漢字の「結」（むすぶ）心をもすぶ）からつけられた名前である。グループの名前のとおり、「ゆいまある」の活動は地域の多くの方々に支えられている。切り開いた牛乳パックを提供してくれる方々が大勢いる。各メンバーが住んでいる町会やご近所が協力してくれたりもしている。中澤さんから、「いつも自宅の前に牛乳パックを置いて行かれる方がいらっしやる。どなたかはわかりませんが、

とても感謝しています」と牛乳パックにまつわる温かいエピソードを聞くこともできた。

メンバーは毎月第1木曜日に、ゆいまある事務局である中澤さんの自宅に集まり、新作のアイデア出し、講習会や教室の制作準備、イベント等を話し合う研修会をひらいている。集合時間など集まるためのルールは何も決めず、「来られるときに来る」という形になっているが、どんなに天気が悪くても、みんな自然と集まってくるという。

「この道30年をめざして百本のバラが出来るまで」という言葉が、ゆいまあるにはある。その言葉の意味には、「新しく入られた人が一本のバラをつくる。みんなで百本のバラの花束ができるまで、この道30年を目指して、頑張っていきたい」という思いが込められている。活動をはじめた28年になるが、活動を通じてこれまでたくさんの人と輪が紡がれている。これからもより多くの人との出会いと仲間づくりを大

切にしていながら、ゆいまあるの活動は続いていくのだと感じる。

元気の源は

中澤さんにボランティア活動について何うと、「私の人生の生き甲斐になっていて、そのおかげで今も健康に過ごせています。感謝の気持ちでいっぱいです」と言葉がかえってきた。多くの方との出会いとたくさん仲間との支えがあることが、本人がいつまでも活動が続けられる元気の源になっている。「ゆいまある」には、メンバーが元気に活動を続けていくための Motto 『「エコクラフトの健康 タ・チ・ツ・テ・ト」 タヲ楽しく・チヲ智慧を出し・ツヲ集い合い・テヲ 手を結び・トヲ飛び立とつ』がある。この Motto のように、笑って楽しく、喜びを多くの人と共有して、これからも元気に夢をもって過ごせる地域社会を目指していきたいと思いを馳せながら、地域の心をつなぐ架け橋となっている。

和紙工芸を通じた人と人との縁結び